

# 富士に祈る 61

國學院大學兼任講師 城崎 陽子  
信仰と伝承 — 岡野聖憲・その15 —



御霊地に建つ「萬靈魂祭塔」(解脱会提供)

先回は、大陸との政治的関係が急を告げるなか、宗教統制が厳しくなり、聖憲が天津教からの離脱を決定するところまでを記した。今回は時代の流れに従って、国民精神の作興を旨とし、教義を整え、御霊地に石碑を建立したりと、その整備を進めるなか、聖憲の母・きせが亡くなるまでを記す。

昭和十一年(一九三六)二月二十六日未明、陸軍士官学校の若い将校たちが、かねてからスローガンとしていた「国家改造・統制派打倒」を目指し、武力をもって天皇親政を実現しようとしたクーデター事件が起こった。世にいう「二・二六事件」である。二十九日には軍部によって鎮定されたがこのクーデター事件によって、内大臣・斎藤実、大蔵大臣・高橋是清、教育総監・渡辺錠太郎といった政府要人が犠牲となった。この事件の背景には、政治家と財閥との癒着を例とした政治腐敗や、

大恐慌から続く深刻な不況などといった社会不安があった。事件の翌日から敷かれた戒厳令は七月ごろまでそのままとなり、軍部の政治支配力が増した東京市下は世情不安の中にあった。

聖憲は、国民精神の作興を推し進めるべき時は今だと考えた。前後するが、この年頭にあたって、『月報』の巻頭言に記された聖憲の「三綱五常」についての言説がその出発点とされる。

解脱とは、自己反省し矯正し自我没却し最高道徳に精進せられ、「三綱五常」惟神の大道遵守、日々夜々一時片時も絶対不忘、報恩感謝し、天職完全に努めて、仁人の道即ち世を益し人を益すこそ解脱の教の尊いと言うのであります。何故解脱は尊いかと云うなれば以上の如きを強調するのであります。三綱五常の大

道即ち是なり、三綱とは、国土、父母、社会

(一) 国土なければ、住めませぬ。  
(二) 父母なければ、生まれませぬ。  
(三) 社会なければ、生存出来ぬ。

五常とは、忠、孝、仁、義、礼  
天徳我生し、元理を判じて絶対に従ひ、其大恩の思念以上の志義毎月報並に教義詳述の如く他に道はなきものであります。

聖憲が「天徳が我を生かす」という思考のもと、自己反省、自我没却し、三綱五常を実際に生きていくという解脱の教えを会員に徹底する一方、支部の活動はますます盛んになっていった。長野県、群馬県、兵庫県、山形県といった各府県の支部は多くの会員を集め、北本宿の大祭に参加するようになった。そして、国内にとどまらず、朝鮮半島を経て、大陸にまでおよ

ぶ外国にも支部が誕生したのである。しかし、教えが広がる一方、その教えが歪曲されて伝えられたり、また、そこに疑念を抱くものも出てきた。そしてついに、聖憲が命を狙われる場面もあったことは、ある意味での「法難」であったろう。

北本宿の御霊地の整備も引き続き行われた。醍醐派解脱分教会の左隣に「感謝会館」を建てたのは梅雨も開けた七月のころであった。これは、年々増え続ける御霊地への参拝者に供するためであった。そして、念願でもあった「萬靈魂祭塔」と「天五色大天空大神」の石碑建立が秋ごろに行われたのである。鴻巣警察署に岡野新三郎の名前で提出された「碑表建設願」には、「萬靈魂祭塔」(縦五・四メートル、横一・五メートル)は「祖先霊崇拝」のため、そして、「天五色大天空神」(縦二・四メートル、横一・五メートル)は「天地宇宙一切

ノ神ヲ祀ル」とされている。聖憲はこれらの碑を彫る石工に対し、文字はできるだけ深く彫り、「精進潔斎」の意味を込めて作業の間は感謝会館に寝泊まりすることを希望した。そして、昭和十一年十一月十日の秋季大会にあわせて「萬靈魂祭塔」の建立記念式典を行ったのである。

建碑にあたって、聖憲が考えていたことは、例えば、後に記された次のような文章に明らかである。予は此の宝塔に、より審かに解釈説明を試みないであろう。何となれば、大地に描く宇宙の法則が総て人類平和の速度の外に、毫も一塵の散らばるを思わないからである。天地開闢以来、生きとし生ける萬靈魂は、競うて解脱に戻るの目あるべく、而かもそが此の宝塔に雲の如く集り、鎮まるとを仰ぐ時、沈黙

悠々たる神秘の宝塔果して何の快弁を揮う乎。(再び萬靈魂祭塔建立に就て『紀念』昭和十五年(一九四〇))

これは、昭和十五年に発刊された『紀念』の中に記されている文章の一部である。萬靈魂祭塔建立の心願は天によって生かされているという真理を理解し、神意を反映した「道徳」「至誠奉公」を心がけるべしという真理を当該の碑文に込め、この前に額づくものすべてがその真理を受け止められるようにすることである。解脱の教えは教義としてまとめられる一方、目に見える形で信者の眼前に整えられることになったのである。また、このことは、聖憲の教えが確固たるものになったことを意味する。そうした最中、聖憲の母・きせが静かに逝った。聖憲は言葉に足りない悲しみに誰はばかりことなく涙を流した。



句・菅谷秀文 26 絵・橋本豊治

## の 望むこと多き人の世 渡彼岸

渡彼岸とは、煩いや悩みがあふれている「此岸」から、修行によって煩惱の激しい流れを渡った向こう岸にある、煩惱が消え去った安らぎの境地、すなわち、悟りの世界の「彼岸」に行くということである。心正しく清浄な行いの日々を送りたいものである。

日本では、古来よりの先祖を崇拝する信仰と混ざり合って、春分・秋分の日を中日として、その後三日を合わせた七日間を「彼岸会」と呼び、墓参などを行う日本独自のものであり、かなり古くから行われている。